

日本文化と文化力ー文化経済学の視点から

駄田井正(久留米大学名誉教授)

1. 日本文化への関心

- ・日本の美術へ 江戸時代から 磁器 漆器 浮世絵
- ・非西欧国で近代化に成功 明治の成功を準備したのが江戸時代
- ・戦後の経済成長 1980年代 ジャパン・アズ・ナンバーワン 日本的経営
- ・低成長時代 持続可能な発展 成熟社会としての江戸時代
- ・近年の関心 サブカルチャー アニメ・マンガ・音楽・ファッション・和食

日本文化が世界にどのような役割をはたすことができるか!

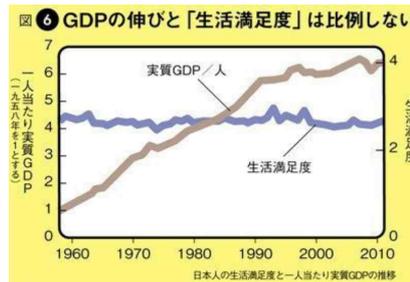
1. 幸福のパラドックスと成長神話の崩壊

「おカネも着物もいらないわ、あなた一人がほしいのよ」 おカネだけで人は幸福になれるのか→

経済成長は人びとを幸福にするのか。幸福のパラドックス (経済と幸福とは正比例しない)

成長神話は2つの命題からなる。

1. 経済が成長すると社会のややこしい問題が解消でき、人びとはより幸福になる。
2. 経済は無限に成長可能である



生活満足度日本一は沖縄県 所得は東京の6割

持続可能な発展 SDGs GDW(Gross Domestic Well-being)

2. なぜ幸福のパラドックスが生じるのか

防衛的活動: 便利、快適、安全を求める活動。慣れるとあたりまえと思い、幸福感が感じられず、さらに快適、便利、安全を求める。トレッドミル効果。キリがなく、カネがかかる。

一億円の資産が5千万円に減ったら不安。一文無しが50万円入ったら大喜び。

創造的活動: 楽しいことを求める活動。飽きることがない。プロセスの効用(過程を楽しむ、コンサマトリー)

防衛的活動で満足感を得ようとするともキリがなく、またカネがかかる。そのために時間がなくなり、創造

文化(広義): 生物の環境適応に関する非遺伝的情報  
 文明: 物質的で可視的 普遍性  
 文化(狭義): 精神的 相対的

的活動ができなくなる。CM/PRにだまされないように。

### 3. 文化経済学からの視点

文化経済学は文化と経済の関係を積極的に捉える。

文化資本(文化資本力):文化(狭義)の経済への寄与

文化産業・文化関連産業 外部効果(地域の集客力)

文化力:富を幸福に変換する能力

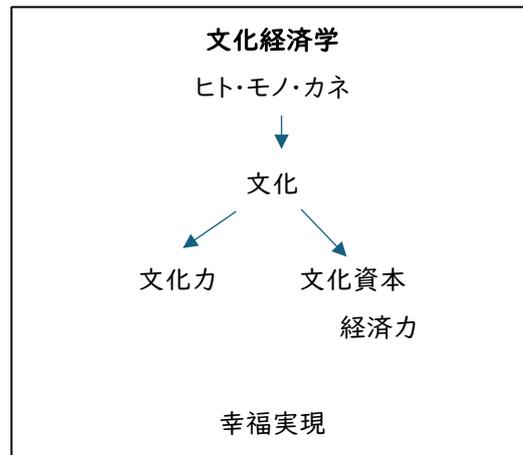
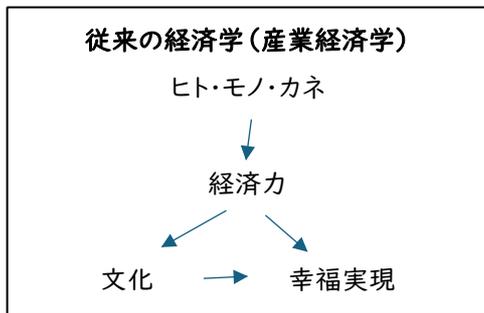
料理の上手な人と下手の人。同じ材料でもできた料理に違いがある。

幸福(生活満足)=文化力×経済力

テレビを見た満足度=テレビの性能(経済力)×番組の内容(文化力)

幸福のパラドックスは、経済力の上昇にもかかわらず、文化力が低下したことから起こる。成長神話は経済力の上昇とともに文化力も向上するものと考えている。「おふくろの味がなくなって袋(レトルト)の味になった」

政策の要点いかにして文化力を低下させないで、できれば向上させて経済を維持・発展させるか。文化力を高めて、同時に経済を維持・発展



させるか。

### 4. 成長から成熟へ

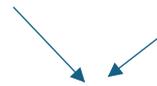
成熟社会:成熟社会とはD.ガブールによる

と、物質的な生産力や人口の増加をあきらめても、社会の進化をあきらめない社会であり、物質文明の高い水準にあり、平和で、人間の本質をわきまえている社会。そして人間の本質として次の3つをあげる。

(1)人間は逆境のなかでは強いが、安楽、富裕。安全のなかでは弱い。

(2)人間は努力しないで得たものは大事にしない。

(3)人間は能力も好みも多様である。



### 5. 日本文化と文化力

日本文化の特色(多田富雄氏による)

(1)山川草木に神が宿る。多神教、自然崇拜、アニミズムの伝統

- (2)象徴力、簡潔を好む。
- (3)ものごのあわれ、無常観、判官びいき(敗者に同情)
- (4)匠の技、細部まで突き詰める、日本工芸技術のルーツ

日本文化の文化力

- ①「もったいない精神」 物にも魂が宿る 針供養 物を大事にする
- ②ワンヘルス 自然との共生 日本庭園
- ③簡潔を好む 清貧の思想 生きがい シンプルライフ 仏教経済学
- ④匠の技 質の良いモノを大事に使う 「道」の精神(人生は修行)
- ⑤主客未分 情報の非対称性の克服 資本主義の文化的矛盾(企業人としては合理的、消費者としては浪費家)

参考 現代経済学と仏教経済学(シューマツハ、E.F.,1975) 筑後川入道(2021,p.5)

	現代経済学	仏教経済学
基本理念	・欲望を増長し、富への執着から暴力・戦争を招く ・物質的価値を追求し、消費を重視する。	・質素と非暴力を主張し、限りある資源を分かち合う ・非物質的価値(正義・調和・美)を重視する。
基本道徳	目先の利益、狭量で卑小、打算的	知恵、正義、勇気、節制
目標	唯物的な生活様式	「正しい生活」
方法論	貨幣価値と数値化価値に変換	非物質的価値と数値化されない質を重視する
豊かさ	適正規模の生産で消費を最大化	適正規模の消費で満足の最大化
労働と余暇	労働は必要悪で苦痛	仕事と余暇は相補的な関係
技術	・資本集約的=労働節約型 ・資源・エネルギーの浪費 ・大量生産技術=巨大化の追求	・頭脳の活用と手の使用 ・資源・エネルギーの節約 ・大衆による生産技術=中間技術 ・Small is beautiful/人間の背丈にあわせる ・自然界との均衡重視
機械化	機械への奴隷	人間の技能と能力を高めるための機械化
農業	食料生産のみの目的	食料生産+人間と自然との融合などが目的
貿易	遠隔地の資源に依存し、世界と貿易を行う	地域資源の活用と地産地消・自給自足

参考文献

駄田井正(2023)『成長から成熟へ』EMESC出版局  
 駄田井正・浦川康弘(2001)『文化の時代の経済学入門』新評論  
 福岡賢正(2000)『楽しい不便』南方新社

呉善花(2009)『日本の曖昧カ―融合する文化が世界を動かす』PHP  
佐倉統(2013)『「便利」は人を不幸にする』新潮社  
シューマツハ、E.F.(1975)『人間復興の経済学』齊藤司郎訳、裕学社  
中野孝次(1992)『清貧の思想』草思社  
ベル、D.(1976)『資本主義の文化的矛盾』林雄二訳、講談社  
筑後川入道九仙坊(2021)『九州独立と日本の創生』  
ガブール、D.(1973)『成熟社会―新しい文明の選択』林雄二訳、講談社